

# 経営学部

## 教授 目黒 良門

優れた文学作品は、組織や社会に関するケーススタディ(事例研究)としてこれを捉えることも出来る。私はこれまで、幾つかの記録文学から、今日の日本社会を考察する上での多少の洞察を得て来た。本書もそんな中の一冊である。

昭和19年にフィリピンに出征した筆者は、同年末に米軍に捕獲され、1年間にレイテ島の米軍捕虜収容所において過ごす。この本は筆者自身の手による捕虜収容所の記録である。

“生きて虜囚の辱めを受けず”という戦陣訓に従って、狂気の組織を生きて来た兵士達は、突然解放され、米軍によって作られた捕虜収容所といういわば“急造の民主的社会”に移送される。捕虜達はそれまでの日本軍においては手にし得なかった物質的自由を手にする。配給の食料をめぐる醜い争い。塙の中での権力闘争。米軍への追従。栄光ある日本軍兵士が突然に与えられた物質的豊かさの中でどうなってしまったか、筆者は冷静に記述を続けて行く。

筆者自身は、俘虜達の争いからは距離を置きつつ、通訳という仕事をこなしながら帰国を待ち続ける。彼は考える。あの戦場だけが異常な空間だったわけではない。自由で民主的で平和であるはずのこの収容所の方がむしろ異常な空間ではないか。そして、平和を取り戻した日本に無事帰国し、有名作家となった筆者は、こうつぶやくのである。

「収容所生活からは確かに得たものがある。それは今でも時々私にささやく。“お前は今でも俘虜ではないのか”と」



大岡昇平(1993)『俘虜記』新潮社

生田分館: X/080/Sh61/Ook 700615149  
Knowledge Base: 913.6/O69 701663015

